紀平真理子のオランダ通信 第29回

コントラクターの活用 Weidsicht農場（2）

プロフィール
1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペインラテンアメリカ学科卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

Evert氏が営むWeidsicht農場では、基本的に子息2人で作業しているが、5～10月の繁忙期に圃場整備や作物の洗浄、パッケージングを含めた作業を農業専門の人材派遣会社を通じ、ポーランドやポルトガルから10人ほど雇用している。キャベツ、小麦、甜菜の収穫はコントラクターに委託。

「播種機やハーベスターは自分たちでも保有しているよ。でも例えばキャベツ用のハーベスターの費用は約3000ユーロ。80～100ha分作業を行なえば元が取れるが、うちは14haなのでコントラクターに依頼したほうが安い。小麦やトウモロコシ用のハーベスターなんて40万ユーロもする。機械の値段と作業面積を考えて選択しているよ」

Evert氏の子息Erwin氏の友人で圃場整備のための人材派遣会社に勤務しているTim氏は「いまオランダではコントラクター存続の危機に直面している。理由は後継ぎがいない生産者が農地を売って、一生産者当たりの圃場面積が拡大しつづけているから。作業面積が増えると個人で機械を購入して、コントラクターに委託する人が減っていく」。一方で、ジャガイモの選別経験者や、大型機械の運転など実務的な技術や経験のある作業者が減少しているそうだ。



Evert氏（右）とTim氏


小麦用コンバインのNew Holland社製CX8060はコントラクター Cintegro社から

なぜ有機栽培に転向したか聞いてみると、「1990年ころメディアでは生産過剰や農業は土壌に悪いなど生産者に対する悪い噂を絶えず報道していた。私は農家になったばかりだったので、未来がないとがっかりしたことを覚えているよ。そこで96年に都市部で需要があり、社会的にも認められる有機栽培に転向したが、化学農薬を使わないことで近隣の生産者との確執も正直あったよ。いまは別物として認めてもらえているけど」。しかし近年オランダ政府により有機栽培が推奨されていること、観光資源として都市部の人を集めることができることを受け、市も推奨を始めたという。Flavorland州には1800の農家があるが、2015年1月から6月までに37の生産者が有機栽培に転向して現在は140（約8％）になった。

同農場はEKO label,USDA Organic,Swiss and Global GAP,SKAL認証を取得している。オランダの有機栽培認証SKALの管理はとても厳しい。もちろん生産者はリスク回避のため保険に加入。店頭に並ぶSKAL認証のついた作物には追跡番号が記載されており、Evert氏はこの番号こそが慣行農業との大きな違いだ、と話す。

「私たちは自分たちをモダン有機栽培農家と呼ぶ。モダン有機栽培農家はプロ意識を持って、目的に合った機械、人材を使用する。収量を上げようと努め、輸出も行なう。収益も雇用も生み出して社会に貢献している」

ちなみに、現在オランダの有機栽培面積は5万5000ha。年間売上高は今年20億ユーロに届くと見られている。年間輸出額は14年が9億2800万ユーロに及び、前年から11％伸張した。今後オランダは有機栽培を売りに農産物の輸出高をさらに増やしていく計画だ。